

前1千年紀におけるペルシア文化の諸問題

佐藤 進

<目次> はじめに

I

II

III

IV

はじめに

小論は、古代世界における「先進文明と土着文化」の関係を周辺の立場からとらえようという問題関心のもとに、前1千年紀のイランについておこなった事例研究の試みにもとづいている。⁽¹⁾

イラン諸族は、前1000年ごろ、イラン高原に移動し、数世紀のあいだに各地に分布した。これらのイラン諸族のうち、早くからアッシリアとの対決をせまられたメディア人が、前7世紀後半にアッシリア帝国を滅ぼしてメソポタミア北部に進出し、前6世紀前半にはアナトリア東部に勢力を拡大した。ついで、メディア人に替って高原の覇者となったペルシア人が、前6世紀後半にリュディア、新バビロニア、エジプトの列強を相ついで征服し、古代オリエン特世界の統一を実現する。この過程において、また帝国支配にさいして、イラン諸族が先進諸文明との接触をますます深め、その影響を受けるにいたったことは疑いない。

ここでは、イラン諸族のうち、とりわけペルシア人における文化受容の問題が取り上げられる。ペルシアを考察の対象としたのは、第一に、ペルシア人が先進諸文明との接触とその影響を受ける機会をもっとも多く有していた西イラン族に属し、しかも帝国支配の当事者であったこと、第二に、史料的条件によるものである。

ところで、ペルシア人の帝国支配は、古代オリエン特世界の文化的状況に新しい事態をもたらしたと考えられる。なぜなら、その政治的統一は複数の先進文明と多様な民族文化をふくんでおり、一つの指導的な文明なり文化を基礎としたそれまでの国家とは異なった性格を有していたからである。したがって、この新しい事態そのものの検討とともに、ペルシア帝国の文化史的位置づけもまた問題にされなければならない。

ここに設定された課題は、もちろん実証的に取り扱われなければならないとしても、むしろ多分に理論的な性格をもつものである。ここでは、文化は、文化として特定された事象としてではなく、社会や経済、政治と深くかかわるも

のとしてとらえられる。ここで求められるものは、古代ペルシア文化の型なり要素分析ではなく、その歴史的展開の条件であり、古代史全体構造の枠のなかに位置づけられた文化である。しかし、そのような枠は、すでに与えられているものではなく、なお仮定されたものにとどまっている。小論は、この仮定された全体構造の枠をさぐる一つの試みでもある。

I

第2次大戦後、ペルセポリス出土諸文書などの相つぐ公刊によって、ペルシア帝国内に由来する史料はたしかにいちじるしい増加をみているが、しかし、それらが伝える情報はなおきわめて限定されたものであり、古代ペルシアの歴史の多くの部分に関して、ギリシア=ローマ史料に依拠しなければならない。

ところで、同時代のギリシア人にとって、ペルシア人は貧しい土地に住む戦争に強い牧人であり、「一度彼らが……さまざまの良いものの味を覚えたが最後、必ずこれに執着して、追い払おうとしてももはやてこでも動こうとはしませんまい」と言った連中として受けとめられていた。したがって、彼らが「世界中でペルシア人ほど外国の風習をとり入れる民族はいない」と評されるのも、当然とみなされていたに相違ない。

貧しい国土に住む、戦争に強くて文化的に劣った辺境の民というペルシア人のイメージは、ギリシア人によって固定化され、その後長く受けつがれてきた。現代の研究者のあいだにおいても、ペルシア人は遊牧の民、あるいは先進地域の支配者になっても文明を破壊しなかつた遊牧種族、とみなされてきた。

もちろん、ペルシア人が先進文明地域に現れたとき、彼ら自身の固有の文化をもっていたことは疑いない。フライは、ペルシア帝国諸制度の形成に三つの基礎を想定している。すなわち、古代オリエントの遺産、インド=ヨーロッパ的遺産、アケメネス朝の大王および臣下の創造的所産である。しかし、この分類はあくまでも理論的に仮定されたものであって、それにもとづいて個々の事例を実証しようとすれば、しばしば困難におちいり、また不毛な議論に走りがちになることにも注意しなければならない。

たとえば、ペルシア王の称号「諸王の王」の起源について考えてみよう。「諸王の王」という表現は、トゥクルティ=ニヌルタ 1 世（前 13 世紀）以来、アッシリア王の名告りに見出されるし、また、前 8 世紀から前 7 世紀にかけてウラルトゥ王がくりかえし使用していたもの⁽⁹⁾である。一方、言語学的な特徴から、ペルシア王の称号がメディア方言形に由来していることが指摘されている。これらの論料から、「諸王の王」という称号は、アッシリア、あるいはウラルトゥからメディアを経てペルシアにもたらされた、と結論⁽¹¹⁾することができるかもしれない。しかし、「諸王の王」という支配者観念は、古代インド=イラン史料のなかに探し出すことも可能⁽¹²⁾である。

もしも、文化的に無防備に近いペルシア人を想像し、彼らが先進文明の圧倒的な影響圏内において帝国支配を創設しなければならない状況を思いうかべるならば、「諸王の王」の称号はオリエントの先行国家から継受したこと以外に考えられない。しかし、ペルシア人が古代世界にもたらした新しいものはとりわけ政治的なものであった事実に注目し、彼らの統治が何から何まで借物から成り立っていたとは考え難いとするならば、支配者称号の古代イラン的基礎こそ重視されなければならない。あるいはまた、ここでかならずしも二者択一的な解決にこだわる必要はないかもしれない。すなわち、「諸王の王」は古代イランの支配者観念にもとづくゆえに、アッシリアあるいはウラルトゥの称号の採用が決定づけられたかもしれない。

観念のような「形なきもの」についての議論は、なかなか実証しがたい。それに比べると、形をのこした物質文化の遺物は、はるかに影響関係を検証しやすいし、確実な結果を提供してくれると考えられる。

アケメネス朝諸王の宮殿建築や浮彫り、工芸品の造型表現は、明らかに多様な異国の諸要素の存在を示している。ダレイオス 1 世みずから、スーサ王宮造営碑文のなかで、宮殿の彫刻や装飾のためにイオニア（ギリシア）人、リュディア人、メディア人、エジプト人、バビロニア人の工人を動員したことを伝えており、ペルセポリス出土のエラム語文書⁽¹³⁾には、王宮建設労働者として帝国内の約 20 の民族名が記録されている。したがって、従来の研究が古代ペルシアの造型表現のなかに異国の要素を探查することを主要な課題としてきたことは不思議

議ではなく、また、多様な外来要素の集成体とみなされたアケメネス朝美術がくりかえし「折衷主義的」と特徴づけられてきたことも、当然であったかもしれない⁽¹⁴⁾。

しかし、最近になって、このような研究方法に対して批判が向けられるようになってきている。それは、まず第一に、分析という方法のもつ限界にかかわっていた。外来要素の析出とその比定は、かならずしも客観的な結果をもたらさなかった。たとえば、パサルガダイにあるキュロス2世の墓は、ある研究者によればメソポタミアのジグuratに、別の研究者によればエラムのそれに関連づけられた。また、ある場合にはウラルトゥ式の石室とメソポタミア起源の階段状台座、他の場合には「伝統的なイランの墓と家屋」に由来する石室とメソポタミア風の台座の組み合わせとして説明された。さらに、支配的な要因として、イオニアの影響を強調する主張もみられた⁽¹⁵⁾。

このような意見の不一致は、たまたま構成要素の比定にさいしての見解の相違にすぎず、形式分類や比較の手続きを精密化すれば解消するようにも考えられるが、困難はむしろ分析を深めれば深めるほど比定の条件が複雑化するところに存する。比定を難しくしているのは、資料の乏しさだけでなく、なによりも表現されたものの「あいまいさ」にもとづいている。この「あいまいさ」は、造型過程の問題にまで踏みこまなければ解明されない。

造型されたものは、構成要素の偶然の寄せ集めの結果ではない。初めに意図と全体についての構想があり、それは完成にいたるまで造型活動を支配する。部分の考察だけから全体は説明できないし、「形のこされたるもの」をほんとうに理解するためには、その背後にかくされた「形なきもの」にもかかわらざるをえない。

ペルシア帝国諸王の造型活動において、企画者と制作者とは同じではなかった。これまで見過ごされてきたこの二重性を明示して、アケメネス朝美術の解釈に新しい道をひらいたのがニイランデルである。もともと、ニイランデルの関心はパサルガダイの石造建築物の制作者に向けられ、彼の重要な貢献も、これらのキュロス2世時代の遺構がイオニアやアナトリアの石工の手仕事になることを検証したことであった。注目されるのは、結論において、彼が次のよう

な指摘をおこなっていることである。すなわち、西方、とくにイオニアの特徴が見い出されのは技術的および形式的な側面であって、造型の内容と意味はまさしくイラン的であった⁽¹⁶⁾ということである。

アケメネス朝の造型活動における企画者の意義をもっとも強調しているのは、⁽¹⁷⁾ルートである。彼女によれば、アケメネス朝美術はなによりも「王の美術」であり、帝国の「公的美術」である。それは、王と宮廷の明確な意図と構想にもとづく「王権と帝国の終始一貫して理想化されたヴィジョン——敬虔、統制、調和的秩序の諸イメージを強調したヴィジョン——の創造」であり、制作は異民族の工人に委託されたが、造型表現の定式化において工人の影響は限られており、王と宮廷の影響はきわめて重要であった。

企画者の意思が造型表現の定式化に反映している例として、彼女はペルシア王宮浮彫りの衣服のひだを挙げている。この衣服のひだはギリシア風に処理されており、アケメネス朝彫刻へのギリシアの影響、さらにはギリシアの工人がアケメネス朝美術を「創造」した⁽¹⁸⁾という主張のもっとも有力な根拠とされてきたものである。ギリシアの工人がペルセポリスで働いていたことは、彼らが現地⁽¹⁹⁾の石切り場にのこした刻文から確認されている。しかし、ルートは、ギリシアのひだの表現と異なり、ペルシアのそれが静的であることを指摘し、その非ギリシア性を説く。ギリシアの工人の手になるとしても、そこに実現されたものは企画者の「王権と帝国の理想化されたヴィジョン」⁽²⁰⁾であり、制作者は「アケメネス朝彫刻の真の創造にほとんどかかわらない」のである。

たしかに、パサルガダイやペルセポリスの建築物とその装飾には、全体としてある統一的な秩序が支配しており、それは部分を観察した結果としての異国の諸要素の寄せ集めとか折衷では解釈できない。造型表現におけるペルシア人のかかわり方が他人まかせでも受動的でもなく、かえって創造的であったとすれば、彼らの創造を可能にした基礎として、彼ら自身の造型表現もまた問われなければならない。

すでに述べたように、従来のアケメネス朝美術の研究においては、外来要素の探査が主要課題とされ、そのため消去法によってのこされたもの、異国の影響によって説明できないものがペルシア的であり、古代イランの伝統にさかの

ぼるものとみなされがちであった。このようなペルシア的、あるいはイランの要素に対する消極的評価が、先アケメネス朝期の遺構、遺物の不在にもとづいていたことは否定できない。第2次大戦後、ジヴィエ遺宝の出土によって「メディア美術」が論じられるようになり、さらにゴディン=テペやパバ=ジャン=テペ、テペ=ヌシ=ジャンにメディアの遺跡が発掘されたが、事態はそれほど大きく変わっていない。

さかのぼって比較しうる証拠をほとんど見出すことができない現状において、ファーカスは「多分、メディアやペルシアの美術に自存した唯一の特徴は、他者の美術を採用する傾向であった！」と嘆じているが、同時に、彼らに固有の美術が消滅しやすい性格を有していた可能性についても示唆している。すなわち、衣服や絨緞のような織物の装飾文様に彼ら独自の様式が打ち出されていたのであり、それはアケメネス朝美術の動物意匠や象眼装飾の原型となりえた。また、スーサ王宮の彩釉煉瓦壁面も、その図案はアッシリアやバビロニアではなく、ペルシアのつづれ織りかフェルトの壁掛けに先例をもとめることが可能であるとしている。⁽²²⁾

文化の影響関係は「形あるもの」においていっそう確実に検証されうるという前提に立って、造型表現の分野について研究史をたどってきたが、一方において、ペルシア的要素を「形のこされたるもの」から同定することはきわめて困難な状況にあり、他方において、アケメネス朝美術の創造性はむしろ「形なきもの」、企画者であるペルシア人の観念に深くかかわることも明らかにされた。史料のいちじるしい不足のなかで、とりわけ文化の影響関係について実証をのぞむことは難しく、議論は多く状況証拠によって進めざるをえない。さきに、ペルシア王の称号「諸王の王」の成立について3つの説明の可能性を述べたが、そのうちいずれを妥当とするかは、歴史的状況とそのなかにおけるペルシア人の存在形態とをどのようにとらえるかによって、異なってくることを示唆した。ルートも、アケメネス朝美術の創造過程において、ペルシア人の文化的伝統や素質とともに、歴史的状況が重要な役割をはたしたことを認めている。⁽²³⁾

II

ペルシア人は、前6世紀半ばの征服開始によって、突如として古代オリエン
ト世界に出現したとみなされがちである。それ以前の彼らについては、先進文
明地域から遠くはなれた辺境の地において、昔ながらの遊牧生活を過ごしてい
たと考えられてきた。これに対して、ルートは、前1千年紀前半のオリエン
ト世界の歴史的=文化的諸関係がペルシア人に影響を与え、アケメネス朝美術の定
式化に深い効果を及ぼしたことを指摘している。帝国以前のペルシアについて
は、最近、ブリアンがいつそう総合的な検討を試みている。⁽²⁴⁾⁽²⁵⁾

ブリアンは、多くの分野の研究成果を援用しながら、帝国以前のペルシアが
決して文明から孤立した辺境の地ではなかったこと、エラムやバビロニアの文
明を受け入れ、さらにメディア-アナトリアあるいはアッシリア-シリアを媒介
として、エーゲ海地域のギリシア都市とも文化的関係をもちえたことを示した。⁽²⁶⁾
そればかりでなく、すでに前7世紀ごろから高原を下って先進地域に入り、
スーサヤバビロンに在住するペルシア人も現れていた。とりわけ、バビロンは
当時最大の国際都市であり、ユダヤ人、フェニキア人、エジプト人、メディア
人、リュディア人、ギリシア人の姿がみられ、また、ニップールなどのバビロ
ニア各地には、多くの民族の居住地が存在していた。⁽²⁷⁾⁽²⁸⁾もちろん、ペルシアは西
方ばかりでなく、定住したアンシャンの位置から、またメディア文化圏に属し
たことによって、東方にも開かれていた。⁽²⁹⁾こうして、「久しい以前から、ペルシ
ア人は——さまざまな仕方で——エーゲからバクトリアにいたる諸関係の、き
わめて濃密なネットワークのなかに組みこまれていた」⁽³⁰⁾のである。

このような文化的ネットワークのなかで、ペルシア人がつねに受容する立場
にあったのではないことを、ブリアンは注意している。それはエラムとの関係
において明らかであり、ペルシア人の織物と金属加工はスーサ王宮において尊
重され、ペルシアの技術用語がエラム語に採り入れられている。⁽³¹⁾⁽³²⁾⁽³³⁾ペルシア人が
オリエント諸文化の影響を広く受け入れたとしても、それは「彼ら自身の内生
的發展の結果」であり、「接木は、ペルシアの幹が樹液に充ちていたゆえに可能

であった」⁽³⁴⁾と、ブリアンは結論している。

古代ギリシア人によって定式化されたペルシア人のイメージは、最近の諸研究によってようやく訂正されつつある。前1千年紀前半の歴史的状況のなかで、ペルシア人の地は孤立した辺境ではなかった。そればかりではなく、彼らが定着した地域パールサ(ペルシア)⁽³⁵⁾は、すでに古い歴史をもつエラム国家の王都の一つアンシャンの所在地であった。

ペルシア人はしばしば遊牧民であったとされてきたが、遊牧(nomadism)という語が誤解のもとをなしてきたことは確かである。彼らの生活はむしろ牧農(pastoralism)⁽³⁶⁾であり、農業と結びついた牧畜であったとしなければならない。

また、ペルシア人の住む土地が貧しいという発言も、十分な根拠にもとづくものではなかった。アンシャンやペルセポリスが位置するマルヴダシュト平野とその周辺は、新石器遺跡のいちじるしい集中によって注目され、中世イスラム時代⁽³⁷⁾において、灌漑農業の発達、手工業生産と遠隔地商業の繁栄によって有名であった。⁽³⁸⁾ペルシア帝国時代に関しても、ペルセポリス出土エラム語文書から推察される⁽³⁸⁾ところによれば、ペルセポリスを中心として多くの町や村が存在し、大麦や小麦、おそらく米をふくむと思われる各種穀物の生産、さまざまな果物の栽培がおこなわれ、⁽³⁹⁾家畜や家禽の飼育もさかんであった。

ヘロドトスによれば、ペルシア人は10部族から成っていた。そのうちの3部族が他を支配しており、アケメネス家をもっとも高貴なパサルガダイ族に属していた。キュロス2世が挙兵したとき、集合したのがこの3部族であった。他に、農耕民の3部族と遊牧民の4部族があった。ペルシアの支配的部族が農耕民であったか、それとも牧民であったかについて、あるいはまた支配的部族の形成について、ヘロドトスはなにも伝えていない。おそらく彼らは、それ以前の軍事的行動とともに、マルヴダシュト平野とその周辺地区を占拠することによって、指導的な地位を確立したことであろう。彼らの来住によって、季節的移動をともなった家畜飼育がこの地方にひろがったが、⁽⁴¹⁾農業は若干の後退はあったとしても、先住のエラム人や一部定着したペルシア人によって維持されたことは疑いない。⁽⁴²⁾アケメネス家などの有力な族長は多数の家畜を所有し、一族子弟を戦士として育成し、⁽⁴³⁾地域内および地域間の調整と防衛の機能をはたし、

多分その代りに住民から税を徴収していた。⁽⁴⁴⁾

前1千年紀前半のイラン高原に特徴的な現象は、城砦首長制の展開である。⁽⁴⁵⁾ 先アケメネス朝期のペルシアの族長に属するものとして確認された城砦遺構はまだ発見されていないが、有力族長たちは要地に一定の場所を囲いこみ、自己の権力と経済の拠点をそこに設置していたに相違ない。古代ペルシアの王侯の遊園として知られたパラダイスは古代ペルシア語の *paridaida*-（「囲い」の意、エラム語形 *bartetaš*）に由来するが、ベルセポリス出土エラム語文書によれば、このパリダイダには、穀物や果実を貯蔵する倉庫があり、⁽⁴⁶⁾ 労働者が働いており、⁽⁴⁷⁾ 果樹が管理されていた。⁽⁴⁸⁾ パリダイダがもともと経済的機能をそなえていたことは明らかであり、⁽⁴⁹⁾ それがさらに帝国以前の族長経済の基地にさかのぼることは十分に考えられうる。

民族文化の主要な享受者であり、担い手であったのはこれらの有力族長たちであり、アケメネス朝の帝国文化を「創造」したのは、有力族長たちの後身であるペルシアの王や貴族であった。族長たちの需要に応じて織物や金属加工の技術が発達し、その製品はスーサの宮廷にも納められた。族長たちはまた、権力者を飾るにふさわしい品を得ようとして交易に関心を有し、その結果、遠隔地の物品のみならず、新しい技術や情報を入手することができた。

族長経済は、すでにガルダ (*garda*, 「家人」の意) と呼ばれる隷属的労働者⁽⁵⁰⁾ をかかえていたと想定され、そのなかにはたしかに専門化した職人も含まれていた。とりわけ、部族連合の指導者の地位にあったアケメネス家の族長経済要員にエラム人の書記が見い出されたことは、「アンジャンのキュロス、テイスペスの子」のエラム語銘文をもったキュロス1世の印章⁽⁵¹⁾ の存在によって疑いない。エラム人書記は、族長経済の会計管理だけではなく、エラムやバビロニア、アッシリアとの外交にも重用されていたに相違ない。キュロス2世の征服にさいして特徴的なことは、戦争だけではなく、外交的手段がたくみに利用されていることである。情報の入手や外交工作は、書記の存在によってはじめて有効におこなわれたであろう。また、グレイオス1世時代、ベルセポリス王室経済を統轄⁽⁵²⁾ していたのは、アルサメスの子で王の叔父にあたるファルナケスであったが、出土史料からうかがわれる文書行政に対する彼の練達ぶりも、族長経済時代以

来の伝統を想定すれば、もっともよく説明できる。

III

ペルシア人は、決して「貧しい国土に住む、文化的に劣った辺境の民」ではなかった。彼らは、オリエント先進地域の征服を開始する前に、すでに諸文明や諸文化との接触に経験を積んでおり⁽⁵³⁾、彼らの必要に応じて新しい要素を受容していたばかりでなく、他から「ペルシア」のものとして特記される製作物をつくり出していた⁽⁵⁴⁾。

彼らは、高原を下って先進文明のただなかに入っていったとき、征服した土地の蓄積された圧倒的な伝統の力にとらえられ、手あたりしだいにその遺産を取り入れて、ついにそのなかに埋没してしまうようなことはなかった。彼らの文化受容は、すぐれて選択的であった⁽⁵⁵⁾。彼らが選択的でありえたのは、これまで明らかにされたように、先帝国内にその理由をもとめることができるが、そのほかにも、彼らが征服したのは単一の文明地域ではなく、複数の文明地域であったこと、したがって文明が相対化されたこと、などにもかかわるであろう。さらに、彼らの選択は現実主義によって特徴づけられ、なによりも征服と支配という政治的現実にもとづいていた。この政治的現実の優先こそ、彼らの文化受容を冷静に選択的たらしめた要因であった。その一例は、帝国公用語の決定に見い出すことができる。

さきに提示した、エラム人書記を用いた文書行政がすでに先帝国内の族長経済に導入されていたという仮説の当否についてはさておき、帝国支配の初期においてエラム語が重視されていたことは、ビストゥン碑文の制作過程の解明によってますます確かである。ダレイオス1世のビストゥン碑文は古代ペルシア語、エラム語、バビロニア語の3種の文字、言語によって記録されており、従来はこの順序にしたがって刻まれたものと考えられていた。しかし、この見解は1963/64年冬季のドイツ隊の調査によってくつがえされ、最初に刻文されたのはエラム語であり、ついでバビロニア語、そして最後に古代ペルシア語文が加えられたことが判明した⁽⁵⁶⁾。

初期の王室官房においてエラム人書記が重用されていたことは、それ以前のペルシアとエラムとの関係から推して、あやしむに足りない。それにもかかわらず、ペルシア人は一般的な行政文書にエラム語を適用することをしなかった。それは明らかに、帝国支配の現実的要請にもとづいていた。エラム語の通用範囲が、きわめて限られていたからである。彼らはまた、古代ペルシア楔形文字を創始したにもかかわらず、支配者の言語と文字を公用語に確立することをあえてしなかった。広大な領域を統一的に集中管理することは緊急の課題であり、そのために彼らは、創始されたばかりの文字を新たに多数の書記に習得させるよりも、現在すでに各地において通用している言語と文字を帝国行政の通信用語に採択し、事態の解決をはかった。そのさい、彼らが選んだのは、西アジア古代の伝統的な国際用語バビロニア語（アッカド語）と楔形文字ではなく、前1千年紀前半に急速に普及するようになったアラム語とアラム文字＝アルファベット⁽⁵⁷⁾であった。

ペルセポリス王室経済文書は、エラム人の故地であるアンシャン（パールサ）ではエラム語がその後も長く、少なくともアルタクセルクセス1世第7年（前458年）まで、会計文書に使用されていたことを示している。しかし、エラム語はそこで独占的地位を維持しつづけていたのではなかった。ペルセポリスの官庁でもアラム語が使用されており、むしろアラム語が正式の公用語⁽⁵⁸⁾であって、エラム語は補助的な現地用語にすぎなかったとさえ考えられる⁽⁵⁹⁾。ペルセポリス王室経済の統轄者であったファルナケスは、エラム人書記のほかに、「羊皮紙文書（使用）のバビロニア（＝アラム）人書記」を管理しており⁽⁶⁰⁾、アラム語文書の使用は、ペルセポリスの官庁だけではなく、周辺各地に配置された宝蔵にまで及んでいたことが推定されうる⁽⁶¹⁾。たしかに、この地域の文書行政はもともとエラム語によっておこなわれていたのであり、ダレイオス1世の統一的な帝国行政通信体系の確立によって、アラム語公用文書の使用がまずペルセポリスにおいて開始され、ついで周辺の宝蔵に拡大されていったことであろう。王室経済の会計記録や通信伝達をエラム語からアラム語に転換させる仕事が、ファルナケスの指導のもとにおこなわれたことは疑いない。それは、下僚の多くがなおエラム語刻文の印章を使用しているなかで、ファルナケス自身がアラム文字で

名前を銘した印章を常用していたことから、十分に推察される。⁽⁶²⁾

文化受容を「受容」という側面だけからとらえると、ペルシア文化は古代オリエント文明の継承にすぎないし、また、先行の諸文明や諸文化からの雑多な受容から成る「折衷的」文化とみなされる。しかし、文化受容はいつでも多かれ少なかれ選択的におこなわれ、その選択の仕方に民族の個性が現れ、また、選択の結果が自己のみならず他に影響を及ぼすこともありうる。

前1千年紀の時代状況において選択の条件は多肢的であり、それだけにペルシア人の選択の特徴がはっきり示される。そのもっとも好い例が、ふたたび公用語としてのアラム語の採用である。

アラム語は、すでに前8世紀には国際的外交用語として通用しており、アッシリア国内のアラム化も進行していた。⁽⁶³⁾ 新バビロニアにおいては、支配者カルデア人がアラム系であり、文書におけるアラム語使用の普及はいちじるしかった。⁽⁶⁴⁾ それにもかかわらず、アッシリア人もカルデア人もアラム語を公用語として取りあげることなく、メソポタミア在来のアッカド語＝楔形文字の文書行政を継承している。ペルシア人にもまた、メソポタミアの政治的遺産を相続する機会が十分に与えられていた。彼らがそれをあえてしなかった理由については、たとえば言語系統の異質性とか、文字システムや文書作成の複雑さに対する忌避など、いくつか考えることができるかもしれない。いずれにせよ、公用語としてのアラム語の採用はペルシア人によって初めておこなわれたのであって、そこに彼らの選択の独自性を認めることができる。この選択は、その後、彼らのあいだに中世ペルシア文字（パフレヴィー文字）の成立をもたらしたばかりでなく、西アジアやインドにおいても他の多くの民族に文字形成をうながした。⁽⁶⁵⁾

公用語としてのアラム語の採用が、言語の普及度と文字システムや文書作成の簡便性に着目した選択であり、それゆえに選択結果の影響の大きさもありえたとすれば、そこにペルシア人の現実合理主義と先見性を指摘することができるかもしれない。しかしながら、ペルシア人の選択が、単に彼らの性向にもとづくものであったとすれば、選択の独自性も超歴史的な民族の素質に還元され、アラム語の採用は一つの歴史的偶然として説明されてもやむをえない。

考慮されなければならないことは、ペルシア人の選択が文書行政の言語とか文字だけにかかわる問題ではなかった、ということである。ペルシア人がアッカド語＝楔形文字の文書行政を採用しなかったのは、帝国全体の統治手段としてであって、バビロニアの国土管理にさいしてその価値は決して否定されなかった。ペルシア人の帝国支配は征服地の現存体制の存続にもとづいておこなわれ、エラムやバビロニア、エジプトの伝統的な文書行政はそのままペルシア人によって容認された。彼らが必要としたのは、各地の政治組織を中央集権的に統制することであり、そのために帝国全体を連絡する有効な行政通信体系を確立することであった。この課題の解決にあたって彼らを選択したのは、オリエントの先行諸国家のいずれかの官僚制機構に依拠することではなく、所与の条件のなかで、新しく帝国支配装置を造り出すことであった。それはまさしく「創造」、すでにシェーダーが指摘しているように、「すべてを覆い、すべてを包括する秩序の創造⁽⁶⁶⁾」であった。アラム語の採用も、この創造の仕事を実現するためにペルシア人がおこなった一つの措置であり、アラム語文書行政はペルシア人が創り出したものである。

新しい文書行政は、先進諸地域の伝統的な文書行政の上に、それらを架橋するものとして位置づけられた。この二重構造は、アケメネス朝の法支配においても見出される。ダレイオス1世は「王のダーク」を各国、各民族の法の上に、それらを総括するものとして設定し、かくして世界帝国を一つの法のもとに支配する最初の例をのこした⁽⁶⁷⁾。

IV

ペルシア人の文化受容を特徴づけているものは、なによりも選択性であり、その選択が彼らの創造的営為、すなわち、新しい世界帝国秩序の創造に深くかかわっていたということである。文化受容が創造的でないとなみを軸にしておこなわれていたとすれば、そこには当然それにともなって、新しい文化形成が想定される。

ところで、ペルシア帝国の文化は、これまでしばしば先行の古代オリエント

文明の粋のなかに位置づけられてきた。たとえば、アミエは、ペルシア帝国の時代を「オリエント文明の伝統の最後の繁栄」⁽⁶⁸⁾とみなしている。彼によれば、アケメネス朝美術は「イラン的独創性」にもかかわらず、本質的にオリエントの伝統に根ざしたものであり、ヘレニズムの侵入とともに、オリエントに新しい時代が始まったとされる。

この通説に対して、ペルシア帝国こそ古代オリエント世界に新しいものをもたらしたのであり、ヘレニズムはその連続においてとらえられなければならない、という主張もありうるであろう。いずれにせよ、古代オリエントの歴史のなかに、ペルシア帝国の文化をどのように位置づけるかが問われる。しかしながら、この位置づけの問題は、実は文化的事象だけではなく、文化的事象を基礎においてささえている社会経済的構造をどのようにとらえるかの問題と深くかかわっており、容易ではない。いまこれを詳論する余裕はなく、さしあたり若干の展望を述べておくにとどめたい。

ルートは、アケメネス朝美術論のなかで、「ペルシア人はそれ自身オリエントの産物 (a product of the East) であつた」⁽⁷⁰⁾と語っているが、ペルシアは「オリエントの産物」というよりも、むしろ前1千年紀古代世界の所産であつたととらえられなければならない。

前1千年紀の歴史的意義を社会経済史の立場から強調しているのが、ディヤコノフを中心としたソビエトの古代史研究者である。⁽⁷¹⁾最近刊行された『古代世界史』第2巻の序論において、ディヤコノフはヤーコプソン、ヤンコフスカヤとの共同執筆により、前1千年紀古代世界の総括を試みている。⁽⁷²⁾古代オリエントに関する部分について、その主張を要約すると、つぎの通りである。

まず、前1千年紀は、古代社会発展の第2期として規定される。第1期(前3～2千年紀)から第2期への転換をうながした決定的契機は、なによりも生産力の領域における鋼鉄生産への移行である。それは剰余生産の増大をもたらしたが、同時にまた、鋼鉄に装備された強力な武器を出現させた。軍事力(強制手段)における新しい変化としては、そのほかに、騎馬戦術の導入と艦隊の創設があげられる。

第2期を特徴づけるものは、古代的世界強国(帝国)の形成である。その理由

は、つぎのように説明される。鋼鉄生産への移行によって、それまで原料(鉱物、木材、家畜)の供給地であり、消費財生産に不利であった山岳地帯においても、食料や織物をそれ自身で確保することが可能になった。さらに、山岳地帯と最大の原料消費地帯(エジプトとメソポタミア南部)とのあいだに諸国家が成立して、国際商業の正常な発達にさまたげられるにいたった。前12～10世紀、エジプトやメソポタミア南部において深刻な経済的および文化的衰微がみられたのも、その影響によるものであった。この事態から脱出する方法は、軍事力によってこれら2つの地域を強制的に合同させることである。新アッシリア(前9～7世紀)とともに始まり、つぎつぎに交替する古代オリエントの帝国は、いずれもこの課題の解決に直面しなければならなかった。

帝国の形成とともに、第2期の社会を特徴づけるものは、自治的都市の出現である。それは、地域間の強制的交換の組織化をはかる帝国にとっても必要な存在として、発達をみた。かくして、第1期においては都市が国家的部門の中心であり、農村において共同体-私的部門が存続していたのに対して、第2期の経済機構は国家的部門が農村を支配し、共同体-私的部門はただ都市に存在するという姿を示すことになる。

このようなディヤコノフの理論を前提として、アケメネス朝帝国における文化生活上の重要な新しい現象に論及しているのが、ウェインベルグ⁽⁷³⁾である。彼によれば、それはこの時期の社会経済的および政治的発展によって呼び起こされたものであるが、とくに決定的役割をはたしたのが、つぎの諸要因であった。すなわち、オリエント全体がアケメネス朝世界帝国に所属したこと、自治的都市の成立とその普及がみられたこと、住民の移動と人種の混交が活発であったこと、あらゆる生活領域において積極的な総合がおこなわれたことである。⁽⁷⁴⁾

ペルシア帝国時代は、メソポタミアにおいて都市化がふたたび盛んになったばかりでなく、それまで都市のなかった諸地域においても都市形成が進行した。ウェインベルグは、これらの都市が前2千年紀までの古代オリエント都市と異なった新しい性格を示し、「市民-神殿-共同体」として特徴づけられることを提議⁽⁷⁵⁾し、それが無条件にギリシアのポリスと類型学的な同体化をおこなうことはできないとしても、構成員以外のものを排除する共同体の閉鎖的性格や自治の

組織化などにおいて、ポリスと相似した構造的要素を有していたこと、そのことがヘレニズムとの接続を容易にしたことを指摘している⁽⁷⁶⁾。

古代オリエントの歴史において前1千年紀が新しい時代であったこと、それが鉄器文化の普及によって開始されたことは疑いない⁽⁷⁷⁾。興味深いことは、世界帝国の実現が、先進地域に属するアッシリアではなく、周辺に位置したイラン高原のペルシア人によってはじめて達成されたことである。ディアコノフはアッシリアとペルシアを一様に取り扱っているけれども、両者の差異について考える必要がある。あわせて、ディアコノフの方法論についても、再検討されなければならないであろう⁽⁷⁸⁾。

ペルシア帝国において文化的に新しい動きが起こったこと、それが世界的文化の方向を示すものであり、ヘレニズムに先行して、それに接続するものであったということについては、ウェインベルグの主張を認めることができる。しかし、アケメネス朝時代における文化の世界化は、すでに述べたように、新しい帝国秩序の創造というペルシア人の営為にもとづくものであり、ウェインベルグのように、世界化の要因をただ結果としての現象の分析から記述するだけでは、十分な説明とは言えない。

ペルシア人によって創造された、あるいは、前1千年紀の歴史的諸条件に基礎づけられた諸可能性のなかから、彼らによって選択され、はじめて実現された世界帝国は、文書行政や法支配の例において明らかであるように、二重構造によって特徴づけられ、したがって、文化についても二重構造が検討されなければならない。すなわち、ペルシア帝国における文化の世界化も、諸民族や諸文化の接触と交流による融合の結果としてのみ説明するべきではなく、一方では、支配者の諸政策による統一化の進行、支配者の宮廷文化の拡大とともに、他方では、地域的多様性の容認という、二重構造のなかで考察されなければならない。

この二重構造のなかで、文化の世界化のチャンネルとして決定的な役割をはたしたのは都市であった。前1千年紀における自治的都市の成立とペルシア帝国時代における自治的都市の増加は、たしかに注目すべき現象であった。しかし、ウェインベルグのように、自治的都市だけを対象としてペルシア帝国にお

ける都市の問題を論ずることは、事態の把握を限定化し、狭めることになる。明確に自治的都市という形態をとらないその他のタイプの都市や局地的センターも、また、文化のチャンネルとして機能していたことを見落としてはならない（このことは、他の諸機能についても多かれ少なかれ当てはまる）。

最後に、前1千年紀におけるイラン文化の問題にすこし論及しておきたい。帝国における文化の二重構造は、イラン諸族のあいだにも認められた。モーレイは、アケメネス朝美術におけるイラン的要素を検証し、アケメネス朝の「宮廷美術」⁽⁷⁹⁾に対して、イランの「民族美術」(folk art)の存在を示唆している。イラン諸族における宮廷文化は先アケメネス朝期にさかのぼり、最初の宮廷文化はメディアのエクバタナに成立した。メディア文化の影響はイラン諸族に及び、ペルシア宮廷文化の形成にも大きく寄与した。しかし、二重構造による分離にもかかわらず、両者は共有するものによってたがいに結びつけられていた。それは、なによりもまず言語⁽⁸⁰⁾であり、また、宗教、口承文学などであった。

〔註〕

- (1) 小論は、1986年7月13日、古代地中海研究会において、共通テーマ「先進文明と土着文化」のもとにおこなった報告「前1千年紀イランにおける〈文化的変容〉の問題」の要点を、さらに展開させたものである。
- (2) ヘロドトス『歴史』I, 71および89; IX, 122; プラトン『法律』III, 695.
- (3) ヘロドトスI, 71. 松平千秋訳(岩波文庫)に拠る。
- (4) 同上I, 135(松平訳)。ストラボン『地理』XI, 13, 9参照。
- (5) A. T. Olmstead, *History of the Persian Empire*, Chicago 1948, p. 60.
- (6) H. Frankfort, *The Art and Architecture of the Ancient Orient*, Harmondworth 1958², p. 213.
- (7) R. N. Frye, *The Institutions*, in *Beiträge zur Achämenidengeschichte* (hrsg. von G. Walser), Wiesbaden 1972, S. 83. なお、『オリエント』15巻1号, 1973年, 146頁の拙稿書評参照。
- (8) šar šarrāni. M.-J. Seux, *Épithètes royales akkadiennes et sumériennes*, Paris 1967, p. 318f.
- (9) MAN MAN^{ME5}-ue. F. W. König, *Handbuch der chaldischer Inschriften*, Osnabrück, 1967², S. 100 et al.
- (10) R. G. Kent, *Old Persian*, New Haven 1953², p. 9.

- (11) R. N. Frye, *The Charisma of Kingship in Ancient Iran*, *Iranica Antiqua*, IV, 1964, p. 37; G. Gnoli, *Politique religieuse et conception de la royauté sous les Achéménides*, *Acta Iranica*, II, 1974, p. 118f.
- (12) 拙稿「諸王の王, 諸邦の王」『オリエント』5巻2号, 1962年, 45~58頁; W. Wüst, *Altpersisches*, 1: Zu Darius I. Elvend, *Wiener Zeitschrift für die Kunde der Morgenländischer*, 47, 1940, S. 135ff.
- (13) 拙稿「アカイメネス朝王室経済の労働者 kurtaš について」『オリエント』16巻1号, 1973年, 12頁.
- (14) J. de Morgan, *Découverte d'une sépulture achéménide à Suse*, *Mémoires de la Délégation en Perse*, VIII, Paris 1905, p. 46.
- (15) キュロス2世の墓に関する諸説については, D. Stronach, *Pasargadae*, in *The Cambridge History of Iran*, II, Cambridge 1985, p. 839f.
- (16) C. Nylander, *Ionians in Pasargadae*, Uppsala 1970, p. 144f.
- (17) M. C. Root, *The King and Kingship in Achaemenid Art*, *Acta Iranica*, 19, Leiden 1979, pp. 1ff.
- (18) G. M. A. Richter, *Greeks in Persia*, *American Journal of Archaeology*, 50, 1946, pp. 16-30.
- (19) G. Carratelli, *Greek Inscriptions of the Middle East*, *East and West*, 16, 1966, pp. 31-34.
- (20) Root, *op. cit.*, p. 13.
- (21) R. D. Barnett, *Median Art*, *Iranica Antiqua*, 2, 1962, pp. 77-95.
- (22) Ann Farkas, *Is There Anything Persian in Persian Art?*, in *Ancient Persia* (ed. by D. Schmandt-Besserat), Malibu 1980, p. 20.
- (23) Root, *op. cit.*, p. 5. なお, アケメネス朝美術の創造過程を図示した p. 6, fig. 1 参照.
- (24) Root, *op. cit.*, p. 28. なお, p. 35, fig. 2 のペルシア人に対する文化的影響関係図参照.
- (25) P. Briant, *La Perse avant l'empire (une état de la question)*, *Iranica Antiqua*, 19, 1984, pp. 71-118.
- (26) *Ibid.*, pp. 89-96.
- (27) ペルシア人の存在を証しているスーサ王宮経済文書 (V. Scheil, *Textes élamite-anzanites, troisième série*, *Mémoires de la Délégation en Perse*, IX, Paris 1907) は, 前7世紀末から前6世紀前半に年代づけられる. cf., P. de Miroschedji, *Notes sur la glyptique de la fin de l'Elam*, *Revue d'Assyriologie*

- et d'archéologie orientale*. 76, 1982, p. 60f.
- (28) R. Zadok, On the Connections between Iran and Babylonia in the Sixth Century B. C., *Iran* 14, 1976, p. 66f. ; Briant, *op. cit.*, p. 95.
- (29) E. F. Weidner, Jojachin, König von Juda, in babylonischen Keilschrifttexten, in *Mélanges Syriens offerts à Monsieur René Dussaud*, II, Paris 1939, pp. 923-935 ; Briant, *op. cit.*, p.92 & n. 81.
- (30) D. J. Wiseman, *Nebuchadrezzar and Babylon*, Oxford 1985, pp. 76-78.
- (31) B. G. Gafurov, Les relations entre l'Asie centrale et l'Iran sous les Achéménides, in *La Persia e il mondo greco-romano*, Roma 1966, p. 202ff.
- (32) Briant, *op. cit.*, p. 100.
- (33) *Ibid.*, p. 94f. ; cf. p. 83f.
- (34) *Ibid.*, p. 103.
- (35) J. Hansman, Elamite, Achaemenians and Anshan, *Iran*, 10, 1972, pp. 101-125 ; E. Reiner, The location of Anšan, *Revue d'Assyriologie et d'archéologie orientale*, 67, 1973, pp. 57-62. なお、アンシャンの歴史については、E. Carter and M. W. Stolper, *Elam. Survey of Political History and Archaeology*, Berkley/Los Angeles/London 1984.
- (36) P. Briant, *État et pasteurs au Moyen-Orient ancien*, Paris/Cambridge 1982 は、ギリシア=ローマ史料のイデオロギー的偏向について批判し、ザグロス地方の住民の社会を「農牧的」(agro-pastoral) と特徴づけている。
- (37) マルヴダシュト平野およびその周辺の遺跡分布について、P. Gotch, A Survey of the Persepolis Plain and Shīrāz Area, *Iran*, 6, 1968, pp. 168-170 ; id., The Persepolis Plain and Shīrāz : Field Survey 2, *Iran*, 7, 1969, pp. 190-192 参照。
- (38) G. Le Strange, *The Lands of the Eastern Caliphate*, 3rd Impression, London 1966, pp. 248-298.
- (39) マルヴダシュト平野におけるアケメネス朝期の遺構については、A. B. Tilia, *Studies and Restorations at Persepolis and other Sites of Fars*, II, Rome 1978, pp. 71-91. また、マルヴダシュト平野古代の灌漑については、G. Kortum, *Die Marvdasht-Ebene in Fars*, Kiel 1976 参照。
- (40) ヘロドトス I, 125. クセノフォン (『キュロスの教育』 I, ii .5) は 12 部族としている。なお、ヘロドトスによって名を挙げられた 10 部族の比定については、R. N. Frye, *The History of Ancient Iran*, München 1984, S. 89f. 参照。
- (41) Carter and Stolper, *op. cit.*, p. 188f.
- (42) Briant, *La Perse*, p. 117f. は、ヘロドトス I, 126 の記事を引用して、アケメ

ネス家の財力を説明している。

- (43) ヘロドトス I, 136; クセノフォン『アナバシス』 I, ix, 5; 『キュロスの教育』 I, ii, 9f.; ストラボン XV, 3, 18 参照。
- (44) H. Koch, Steuern in der achämenidischen Persis? *Zeitschrift für Assyriologie*, 70/1, 1980, S. 105-137 は、ペルセポリス出土エラム語文書の分析にもとづいて、ペルシア本国においても住民課税が存在したことを主張している。コッホの論証についてはなお検討を要するとしても、何らかの住民課税が存在したことは確かであり、それはさらに帝国以前の族長経済時代に起源すると思われる。
- (45) 拙稿「アカイメネス朝ペルシア王室経済の研究(二)」『東京教育大学文学部史学研究』106号, 1976年, 7-13頁参照。
- (46) PF 144-158 (R. T. Hallock, *Persepolis Fortification Tablets*, Chicago 1969).
- (47) PF 1815; PT 48, 49, 59 (G. G. Cameron, *Persepolis Treasury Tablets*, Chicago 1948); PT 1963 : 9 (G. G. Cameron, *New Tablets from the Persepolis Treasury*, *Journal of Near Eastern Studies*, 24, 1965, p. 175).
- (48) PFa : 33 (R. T. Hallock, *Selected Fortification Texts*, *Cahiers de la Délégation Archéologique Française en Iran*, 8, 1978, p. 135f.)
- (49) W. Hinz, *Neue Wege im Altpersischen*, Wiesbaden 1973, S. 147 は、「所領」の訳を挙げている。
- (50) 拙稿「アカイメネス朝ペルシア王室経済の研究(二)」11-13頁。
- (51) R. T. Hallock, The Use of Seals on the Persepolis Fortification Tablets, in *Seals and Sealing in the Ancient Near East* (eds. by McG. Gibson and R. D. Biggs), Malibu 1977, p. 127.
- (52) Hallock, *ibid.*, p. 128; *id.*, The Evidence of the Persepolis Tablets, in *The Cambridge History of Iran*, II, Cambridge 1985, p. 591.
- (53) 同様な事例は、先行する諸時期のアムル人やアラム人などのステップ牧羊民についても認められる。H. Klengel, *Zwischen Zelt und Palast*, Leipzig/Wien 1972, S. 135 は、古代オリエントにおいて純粋の「遊牧民国家」は存在しなかったこと、これらのステップ牧羊民は、文明地域を征服して国家を形成する以前に、すでに文明地域の定住民と接触を有し、その風俗を受容していたことを指摘している。
- (54) スーサ王室経済文書 No.166 の uk-ku-ra-ap mBar-šip-ip-be および ša-mar-tuk mBar-šip-ip-be. ukkurap について、Ю. Б. Юсифов, Эламские хозяйственные документы из Суз. Транскрипция, Перевод и комментарий, *Вестник Древней Истории*, 1963/3, стр.243 は、「楯」, šamartuk について、ユシフォフ(стр.252)は「投槍」, W. Hinz, Zu den Zeughaustäfelchen aus Susa, in *Festschrift*

- für W. Eilers, Wiesbaden 1967, S. 96 は「投石器」の訳を提示している。
- (55) Root, *op. cit.*, p. 23f も、ペルシア人の「意識的選択」について論及している。
- (56) H. Luschej, Studien zu dem Darius-Relief in Bisutun, *Archäologische Mitteilungen aus Iran*, N. F. 1, 1968, S. 63-94 ; W. Hinz, Die Entstehung der altpersischen Keilschrift, *ibid.*, S. 95-98 ; R. Borger, Die Chronologie des Darius-Denkmal am Behistun-Felsen, *Nachrichten der Akademie der Wissenschaften in Göttingen*, I. Philol.-Hist. Kl., 1982, Nr. 3, S. 5f. und 30.
- (57) Ed. Meyer, *Geschichte des Altertums*, Bd. 4/1, 5. Aufl., Stuttgart 1954, S. 43f. ; H. H. Schaeder, *Iranische Beiträge* I, Halle 1930, S. 1 ff.
- (58) R. A. Bowman, *Aramaic Ritual Texts from Persepolis*, Chicago 1970, p. 18f.
- (59) Cameron, *Persepolis Treasury Tablets*, pp. 20, 30f.
- (60) ペルセポリス城砦文書 PF1561, 1807, 1808, 1810, 1828, 1947.
- (61) Hallock, *Persepolis Fortification Tablets*, pp. 4 and 14.
- (62) id., The Use of Seals, p. 128.
- (63) H. Tadmor, The Aramaization of Assyria : Aspects of Western Impact, in *Mesopotamien und seine Nachbarn* (hrsg. von H.-J. Nissen & J. Renger), II, Berlin 1982, S. 449-470.
- (64) M. San Nicolò, *Beiträge zur Rechtsgeschichte im Bereiche der keilschriftlichen Rechtsquellen*, Oslo 1931, S. 130ff. ; Wiseman, *op. cit.*, p. 1f.
- (65) H. Humbach, Aramaeo-Iranian and Pahlavi, *Acta Iranica*, 2, 1974, pp. 237ff.
- (66) H. H. Schaeder, Das persische Weltreich (1941, Druck 1942), in *Der Mensch in Orient und Okzident*, München 1960, S. 62.
- (67) 拙稿「データ——ペルシア帝国における『王の法』——」『オリエント』28 巻 2 号, 1986 年, 1-16 頁。
- (68) ピエール・アミエ (鶴飼温子訳) 『古代オリエント文明』白水社, 1979 年, 「日本語版への序文」7 頁。
- (69) P. Amiet, *Les civilisations antique du Proche-Orient*, Paris 1977?, p. 124. 邦訳 (前掲書) 130-131 頁。
- (70) Root, *op. cit.*, p. 41.
- (71) 拙稿「メソポタミアの政治体制」『オリエント史講座』第 2 巻, 学生社, 1985 年, 21-22 頁参照。
- (72) И. М. Дьяконов, В. А. Якобсон, Н. Б. Янковская, Общие черты второго Периода древней истории, *История Древнего Мира*, II, Москва 1982, стр. 5 и. сл.

- (73) J. P. Weinberg, Bemerkungen zum Problem "Der Vorhellenismus im Vorderen Orient", *Klio*, 58/1, 1976, S. 5-20 ;
—20; И. П. Вейнберг, Предэллизм на восток, *Исчорпя Древнего Мира*, II, стр. 198-212.
- (74) R. Mac. Adams, *Heartland of Cities*, Chicago/London 1981, p. 178.
- (75) J. P. Weinberg, Die Agrarverhältnisse in der Bürger-Tempel-Gemeinde der Achämenidenzeit, *Acta Antiqua Academiae Scientiarum Hungaricae*, 22, 1974, S. 473f.
- (76) id., Bemerkungen, S. 17-18.
- (77) 拙稿「世界帝国の構造」『古代オリエント』(屋形禎亮編), 有斐閣, 1980年, 74-83頁.
- (78) 拙稿「アッシリア帝国の社会構造」『歴史学研究』534号, 1984年, 49-50頁.
- (79) P. R. S. Moorey, The Iranian Contribution to Achaemenid Material Culture, *Iran*, 23, 1985, pp. 21-37.
- (80) P. Lecoq, La langue des inscriptions achéménides, *Acta Iranica*, II, 1974, pp. 55-62 は前1千年紀半ばのイラン世界にコイネーの存在を主張している.